新作大型立佞武多は「閻魔」に決定！

11月６日、令和６年新作大型立佞武多の下絵発表が行われました。題名は「閻魔（えんま）」。

閻魔大王は地獄の王であり、インド神話では「ヤマ」とも呼ばれる。
「うそをつけば…」ということわざでも知られ、恐ろしいものの代名詞とされているが「子どもの守り神」地蔵菩薩と同一神とされている。
コロナ禍を経て、見えていたが見ようとしなかった現代社会の問題がますます表面化されてきた。世界各地で紛争が起こり、さまざまな暴力、ハラスメント、虚偽、どう喝、差別、犯罪行為が世に溢れている。良くも悪くも個人が自由に意見を発信できる時代になったが、今、モラルが求められているのではないだろうか。
場面は、浄玻璃（じょうはり）の鏡に生前の行いを映し、裁きを下す閻魔大王の姿。
厳しい世でも、これからの未来を担う子どもたちへ、道を示さなければという思いを込めて制作。

制作を手掛けるねぷた表現師の忠汰（本名・齊藤忠大）さんは「見たときに映える赤色を意識した。三つ目の閻魔大王に見られているよ、という迫力ある構図にしているので、いろいろ感じ取ってほしい」と話しました。

下絵の説明をする忠汰さん（左）

新作大型立佞武多「閻魔」の下絵

今月号の表紙

〔日頃の活動を披露！　市民総合文化祭〕

今月号の表紙は、市民総合文化祭の様子です。
10月28日、29日には金木公民館で金木文化団体協議会主催の「金木文化まつり」が、11月３日、４日には中央公民館で五所川原市文化振興会議主催の「第60回五所川原文化祭」が開催されました。
舞台ではダンスや歌の発表が行われたほか、館内では絵画や生け花、陶芸などの作品が多数展示され、参加団体の会員が日頃から磨いた腕を披露しました。

金木文化団体協議会の畑中力郎会長は「高齢化により参加団体が少なくなってきているが、頑張って継続していきたい」、五所川原市文化振興会議の佐藤文治会長は「昨年は規模を縮小しての開催だったが、今年はコロナ禍からの完全復活を遂げた文化祭だったため、お客さんも非常に喜んでいた。この調子で今後も当市の芸術文化を広く発信していきたい」と話しました。